

おにぎりの味

中谷宇吉郎

青空文庫

お握りには、いろいろな思い出がある。

北陸の片田舎で育った私たちは、中学へ行くまで、洋服を着た小学生というものは、誰も見たことがなかった。紺^{こん}紺^{がすり}の筒つぽに、ちびた下駄。雨の降る日は、蘭草^{いぐさ}でつくつたみのぼうしをかぶって、学校へ通う。外套^{がいとう}やレインコートはもちろんのこと、傘をもつことすら、小学生には非常な贅^{ぜいたく}沢と考えられていた。

そういう土地であるから、お握りは、日常生活に、かなり直結したものであった。遠足や運動会の時はもちろんのこと、お弁当にも、ときどきお握りをもたされた。梅干のはいった大きいお握りで、とろろ昆布でくるむか、紫蘇^{しそ}の粉をふりかけるかしてあった。浅草^{あさく}海苔^{さのり}をまくというような贅^{ぜいたく}沢なことは、滅多にしなかった。

しかしそういうお握りの思い出は、あまり残っていない。それよりも、今でも鮮^{あざや}かに印象に残っているのは、ご飯を焚^たいた時のおこげのお握りである。

十数人の大家族だったので、女中が朝暗いうちから起きて、煤^{すす}けたかまどに大きい釜^{かま}をかけて、粗朶^{そだ}を焚^たきつける。薄暗い土間に、青味をおびた煙が立ちこめ、かまどの口から、赤い焰^{ほのお}が蛇^{へび}の舌のように、ちらちらと出る。

私と弟とは、時々早く起きて、このかまどの部屋へ行くことがあった。おこげのお握りがもらえるからである。ご飯がたき上がると、女中が釜をもち上げ、板敷の広い台所へもってくる。釜の外側には、煤が一面についているので、それに点いた火が、細長い光の点線になって、チカチカと光る。まだ覚め切らぬねぼけまなこの目には、それが夢のつづきのように見えた。

やがてその火も消え、女中が蓋ふたをとると、真白まっしろい湯気がもうもうと立ち上がる。たき立てのご飯の匂においが、ほのぼのとおなかの底まで浸しみ込むような気がした。女中は大きいしゃもじで山盛りにご飯をすくい上げて、おひつに移す。最後のおこげのところだけは、上手に釜底にくつついたまま残されている。その薄うす狐色きつねいろのおこげの皮に、塩をばらつとふつて、しゃもじでぐいとこそげると、いかにもおいしそうな、おこげがとれてくる。女中は、それを無雑作むぞうさにちよつと握にぎつて、小さいお握りにして、「さあ」といって渡してくれた。

香ばしいおこげに、よく効いた塩味。このあついお握りを吹きながら食べると、たき立てのご飯の匂においが、むせるように鼻をつく。これが今でも頭の片隅に残っている、五十年前のお握りの思い出である。

その後大人になって、いろいろおいしいものも食べてみたが、幼い頃のこのおこげの握りのような、温かく健やかな味のものには、二度と出会ったことがないような気がする。都会で育ったうちの子供たちは、恐らくこういう味を知らずに過ごしてきたにちがいない。一ぺん教えてやりたいような気がするが、それはほとんど不可能に近いことであろう。おこげの握りの味は、学校通いに雨傘をもつというような贅沢を、一度おぼえた子供には、リアライズされない種類の味と思われるからである。

（昭和三十一年九月五日）

青空文庫情報

底本：「中谷宇吉郎随筆集」岩波文庫、岩波書店

1988（昭和63）年9月16日第1刷発行

2011（平成23）年1月6日第26刷発行

底本の親本：「中谷宇吉郎随筆選集3」朝日新聞社

1966（昭和41）年

初出：「暮しの手帖」

1956（昭和31）年9月5日

※初出時の表題は「五十年前」です。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おにぎりの味

中谷宇吉郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>